中国雲南班 A

コラージュされた風景：雲南森林史の試み

阿部健一（国立民族学博物館・地域研究企画交流センター）

キーワード：森林史・雲南・森林政策・自留山・植林

国際シンポジウム『緑の履歴 : 中国環境問題への地域生態史的アプローチ』（2004 年 1 月主催：地域研究企画交流センター、共催：総合地球学研究所、京都大学東南アジア研究センター) で報告した論文の日本語版。改訂したうえ要約している。

Collaged Landscape: History and Political Ecology of Forests in Yunnan

Ken-ichi ABE(Japan Centre for Area Studies, National Museum of Ethnology)

Keywords: Yunnan, Forest History, Political Ecology, Plantation Forest

(Japanese version of a paper presented at International Symposium “Impacts on the Good Erath: Recent Environmental History in China”. The content is revised and summarized)

０　はじめに

中国文明は、森林に最も依存した（あるいは犠牲としてきた）文明といわれる。耕地は森林を蚕食し続け、1950 年代の森林面積は、わずか 7.9％、砂漠の国なみであった。

その後、さまざまな森林政策が立案され、実施されてきた。にもかかわらず、現実の政治社会的な状況は、むしろ森林の消失を助長してきた面もある。1990 年代になっても、中国の森林被覆率は、いまだ１４％。世界平均約３４％の半分以下であり、依然として中国は、森林の乏しい国のひとつである。

本報告では、この 1950 年代、すなわち中華人民共和国成立直後から、今日にいたるまでの中国の森林の変化の歴史を追う。広い中国の中で、とくにとりあげるのは我々のプロジェクトの対象地域である雲南。プロジェクトの用語で言えば「プロキシ」を森林と措定し、 雲南の生態史を明らかにするわけである。

本報告は、おおきく二つに分かれる。最初に、中華人民共和国成立以後の森林の変遷をいくつかの時期に区分してみた。時代区分については､植生が大きく変化した｢出来事｣に焦点をあてた。森林政策の変化はそうした｢出来事｣のひとつであるが、必ずしも重要でないものもある。ここでの時代区分は、あくまでも森林の変遷に基づくものであり、単なる森林政策の変遷ではない。

次に、森林史の大きな転換点として、「三定事業」とりわけ「自留山」に着目する。森林政策のひとつで、いままで集団で経営されていた林地の一部が、「自留山」として、農民に分配され、経営が個人にゆだねられることになった。とりわけ自留山に注目したのは、そこに、地域住民の森林への意識と森林経営にたいする意向が反映されているからである。

広大で多様な中国では、中央政府の政策は、その細部は地方政府の裁量にまかされることになる。「三定事業」もそうであり、たとえば自留山の分配のしかたは、地域によってそれぞれ決められている。分配された自留山の経営は、その地域の社会経済的、さらに文化的な条件によって大きく異なってくる。こうした自留山経営の地域的バリエーションを、われわれの研究対象地域である雲南省を例にとって示したいのである。

１　森林の変遷

中華人民共和国成立後の中国の林業政策の展開に関しては、田中 [1990] が 4 つの時期に区分している。第 1

期は、1949 ～ 57 年の基礎形成期。第二期、1958 ～ 65 年は発展期。第三期は 1966 ～ 76 年で挫折期。そして最後が振興期であり、1976 年から今日までとする。

基礎形成期には、長期化した戦争の後にようやく林業政策の基盤ができた時期である。造林木の所有を土地所有者でなく造林したものに帰属さすことにより個人の植林が奨励されたが、現実には農地ごとに焼畑の拡大などで、造林面積よりも森林の消失面積のほうが大きかった。このため、荒れた産地の植生を回復する手段として山地での耕作を制限する「封山育林」政策がとられた。発展期は、植林事業が政府の手によって本格的に進められた時期とする。造林が組織的かつ大規模に推進された時期であるという。「飛播」すなわち航空機による種子散布はこの時期の大規模造林の典型ともいえる事業である。都市・農村の緑化については、住宅、村、道、河の周辺を重点的に緑化する「四旁緑化」が推進された。雲南ではユーカリが造林樹種として選択され、広範囲に植林された。並木の古木はこの時のものである。その後文化大革命の影響を受け、林業の管理基盤が弱体したのを挫折期とする。文革終了後、振興期には、再び林業基盤が再整備され、1981 年には、「三定事業」が、1984 年には森林法が公布され法制度が整備された。「三定事業」とは、山林の所有権の安定（「穩定山権林権」）、生産責任制の確定（「确定林業生産責任制」）、自留山を確定（划定自留山））するものである。また西北中国の砂漠化に対しての三北防護林という大事業も開始された。

一方、Edmonds[1994] は、新生中国成立から文化大革命開始まで　(1949 ～ 66 年)、文革中（1966 ～ 70 年代半ば）、文革後（1978 年～）と 3 時期に分けている。時期を区切った基準は必ずしも明瞭でないが、文化大革命期間中を森林政策が機能せず、山林が荒廃した「生態学的災害」期間としてとくに重視したのが特徴である。

一方、ここでは、別の見方をしてみる。森林政策の展開ではなく、現実の植生の変遷から組み立てる「森林」史である。社会変化や主な政策の変化が、農民の日常生活、生産活動を通して、森林に影響を及ぼすのは間違いない。森林史へのアプローチとして、まず農民へのインタビューから、盆地の周辺で、現実にいつ、大きな植生の変化がおこったのかを聞き取り、その上で原因となった政策や社会･経済の変化を特定する方法をとってみる。

こうして盆地周辺の「森林」の歴史を再現した時、二つの「出来事」がとくに重要であった。大躍進運動と「三定事業」である。

戦争で、荒廃した山林に決定的な打撃を与えたのが、大躍進運動である。「土法煉鋼炉」と「公共食堂」のためである。

土法煉鋼炉は近代的な鋼炉でなく、伝統的な鋼炉での鉄鋼生産の増産を意図したものである。中国全土の隅々でこの土法煉鋼炉がつくられた。農民の所有する鉄の鍋や釜が供出され、使いものにならないくず鉄が多量につくられた。荒唐無稽な錬金術だが、その燃料として森林が伐採されることになった。

公共食堂制の下では、人民公社の食堂で三食とも公社員全員が一度に食事を行うことになった。多人数の食事を一度に多量につくるため、大きなかまどと鍋が用意され、それに見合う強い火力が必要となった、かつて各家庭で食事の準備をしていた頃は粗朶などあり合わせの燃材でよかったものが、まとまった燃料材が必要となる。このため食堂の料理人は燃材の確保に躍起となることになった。

この時期、森林資源がどのように消費されたのかを示す統計資料はほとんどない。そのなかで、雲南・大理州の 1963 年の調査は貴重である。1950 年から 1961 年の 12 年間に消失した森林資源量の統計がある。

それによると、12 年間に 773.47 万㎥が消失されたが、大躍進のわずか 3 年間に消失した資源量だけで 480.85 万㎥に上り、この時期に急激に、いびつな伐採が行われていたことを示している。大躍進時代に消失した資源量のうち、273.59 ㎥（56.9%）が集団食堂で消費され、64.11 万㎥（13.3%）が土法煉鋼炉に消費された。森林資源消費の原因のそれぞれ第 1 位と第 2 位をしめる。

田中が森林政策の面で発展期としたこの期間は、実は森林が最も破壊された時になる。また、Edmonds　が重視した「生態的大災害」は、文革期でなくその前の大躍進の時期に最も激しくおこった。文化大革命期は、むしろ大躍進のときに痛手を受けた森林の回復に何ら有効な手立てを講ずることができなかった時期となる。自然災害も多かったが、なによりも政治的混迷が響いたのである。

「三定事業」は大躍進と引き続く文化大革命の時期の森林の受難期のあと、政府の森林政策が森林の再生に向けて次々となされた中で、最も影響力をもった政策である。農業における生産責任制に対応するものであり、山林の一部が自留山として各々に分配された。政府の指導や援助（植え付け費用の貸与、苗の廉価供給など）を受

けつつ、農民が自ら植林を行い、生産物を販売できることになった。

農業において、自留地の分配をうけた後、急激に生産性が高まったように、緑化の面でも、生産物の販売を期待した農民の積極的な植林が期待された。

実際、中国全体で、1980 年代の木材需要の伸びは大きく、たとえば 1979 年から 1985 年の間に建設された住宅戸数は、それまでの 30 年間をうわまわった。中国の経済発展は、今日に至るまで好調であり、都市の建設ラッシュは続いている。消費の多様化は、木材需要の多様化ももたらし、たとえば建築物への内装材の利用など、量的な変化だけでなく質的な変化ももたらしている。自留山は、農民の経済的インセンティティブを背景に植林を促進し、増加・多様化する木材需要に、迅速に対応することを狙ったものである

中国全体として、効果は現れてきている。雲南省では、1990 年代の中ごろから、木材市場が立ち、自留山からの木材が出回るようになった。1993 年にいたって、はじめて中国の森林面積減少に歯止めがかかる。大きな転換である。

植林は、「四傍緑化」や「飛播」の頃とは異なり、単なる政治的スローガンではなくなった。かつてのように実態とは異なる植林実績が、政府に報告されることもない。植林の経済的利益は、自留山という制度を通じて、地域住民に直接反映されるようになってきている。そのため、植林についての人々の関心は高まり、植林は、地域住民にとって、自分たちの生活からかけはなれたものではなく、住民の生産活動の一部として「実体」となったのである。

中国の植林事業は、歴史的にも、そして依然として今日も、国家的なプロジェクトで行うことが特徴のひとつである。国家のプロジェクトとして認定されれば、資本・技術・労力が集中的に投下され、大規模な植林が開始される。最近の例をあげれば、三北林業、平原防護林、黄河中流防護林、長江中上流防護林などがそうである。

一方、自留山の分配が契機となった植林は、国家によるものではなく、個々の農民の手によるものである。トップダウンではなく、ボトムアップの植林活動といえる。経済開放政策をうけて、市場経済が地方にまで浸透したことを背景に、農民が、政府からの命令ではなく、自発的に植林を行うようになってきた。中国の近年の森林史のなかで、従来見られなかった新たな動きである。

この自留山での植林の実態を知ることは、中国の森林の今後を考えるうえで重要になってくる。自留山で実際どのように植林が行われているのか、以下雲南省での事例を紹介する。自留山の農民による利用、運営の仕方は、地域に、さらに民族によってさまざまである。荒廃した雲南の大地をキャンバスに見立てれば、そこには、違った色合いをもった植林地が貼り付けられてゆくように見える。

２　自留山への植林

雲南省の地形は変化に富み、自然植生は多様である。さらに、住んでいる人々も、漢民族のほか、異なる歴史・文化をもつ２０の少数民族が共存している。植生の点でも、民族的にも、雲南はもともとモザイク状であった。そこにさらに、社会経済的要因も加わり、自留山での植林は、地域ごとに、異なる展開を見せることになる

自留山の農民への分割は、すぐさま自発的な植林活動に結びついたわけではない。森林保全や森林面積の増加という点では、むしろ、一時的には、期待していたのとは逆の影響もあった。農民が、分配された自留山に植林されていた材を、すぐさま伐採・販売してしまったのである。

雲南南西部の、騰沖盆地周辺がそうした事例のひとつである。漢民族が多く住むこの地域では、自留山の分配は、村の管理下にあった植林地があてられた。管理に行き届きた、建材として経済価値の高い南洋杉（Araucaria cunninghamii）の成熟林であったが、1983 年の分配直後、農民の手により伐採・販売されてしまう。植林地が自分のものになったら最後、「政府が政策を変更しないうちに、金に換えてしまう」ほうが得策と判断したのである。

こうした伐採騒動は、すでにある植林地が分配されたところでは、かなり広範にみられた。伐採騒動が一段落して、ようやく農民の手による植林が始まる。引き続き、騰沖の例をあげれば、翌年から、地方政府の廉価な苗木の支給をうけて、再び南洋杉、さらに、崋山松 (Pinus armandii) と雲南松 (Pinus yunnanensis) の自留山への植林が開始される。松２種は地元で消費され、南洋杉は県外の市場での販売も期待されている。

植林地でなく、裸地が分配されたところの例も挙げておこう。

弥渡盆地は、雲南のほぼ中央に位置している。古くから漢民族が移住した地域であり、盆地を取り囲む山の斜面は、侵食のすすんだ裸地となっている。農民に、この斜面が自留山として分配されたのは、中央政府の決定から 4 年たってのことである。

分配の仕方は、きわめておおざっぱであった。家族数や斜面の緩急は考慮に入れながら、斜面の底辺を適当に区切り、そこから斜面に鉛直線状に伸ばした区画、つまり斜面を短冊状に区切った地片が、家族単位で与えられた。

分配がいい加減だったのは、自留山に価値があるとは思えなかったからである。自留山が今後どうなるのか、自分たちになにをもたらすのかはっきりしなかったためである。むしろ分配に伴う義務や税金を懸念し、分配を受けなかった家族もある。

実際に、地方政府から、自留山にはユーカリ（Eucalyptus globurus) の植林が義務つけられた。そのため、いったん分配を受けても、植林のための労働力の負担が大きく、自留山を返上した農家もある。

地方政府は、2 回にわけて、ユーカリの植林を指導している。一回目は、自留山を分割した直後（1985 ～ 86)。1 畝あたり 24 元を、苗の購入用に無利子で貸し付けた。二回目は、1989 年から 90 年。このときは、苗を無料で配布した。当初は、農民が積極的に植林活動を行ったのではなく、政府の指導と援助を受け、受身的に行ったのである。

今日、斜面のユーカリ林は比較的良好に維持されている。一部の農家は、政府の指導による一斉植林以降、必要に応じて補植すら行っている。農民がユーカリの植林に、当初と違い積極的になったのは、ユーカリが金になるとわかったからである。

ユーカリの葉からは油が取れる。このユーカリ油の需要が 1990 年代にはいって急増し、農閑期である冬の間に、盆地のいたるところでユーカリの葉を蒸留する光景が見られるようになった。その原料である、ユーカリの葉が高く売れるようになったのである。

政府の植栽の目的は、斜面の土壌流出保全であった。しかし農民にとって、これは、ユーカリを植える積極的動機とはならない。現実に金儲けにならない限り、農民は自留山に関心を示さないのである。今日、ユーカリの葉を販売して得る現金収入はきわめて大きい。それまで唯一といってもよかった豚の飼育による現金収入源に匹敵するようになっている。

また、自留山が農民に、現実的には、分割されなかったり、あるいは形式的に分配されただけで、実質的に、以前となんら変化がなかった地域も数多い。

雲南省の中央部の哀牢山脈山中のハニ族の集落は、標高 2000 m近い高地にある。集落より下部には、棚田が広がり、上部は、かつて焼畑を行い、今でも一部を畑にしている、二次林となっている。森林の一画は、神山（龍山）として手付かずのまま残している。

調査した集落では、一家族あたり一様に 0.5 畝を自留山として割り当てた。神山をふくむ残りの 200 畝は分割せずに、集体林として村で管理することにしている。

この集落は、幹線道路から離れ、市場へ木材を搬出するのが容易ではない。自留山に植えられるのは、市場価値の高い樹種（tree species）でなく､むしろ自給的な果樹や燃料材となる水冬瓜（Alunus nepalensis）である。商品価値の高いナンヨウスギも植えることがあるが、販売目的でなく、もっぱら自分の家の建て直し用である。現金収入源として自留山に期待はしていない。自留山の価値は、「孫に棺桶用の材を残せること」という人もいるのである。ちなみに、現金収入源は出稼ぎによっている。

ハニ族の集落もそうであるが、森林の一部あるいは大部分を神山として、利用を禁じている少数民族は多い。そうした地域では、森林を自留山に分割しなかったり、形式的に行っただけのところもある。

雲南南部の低地のタイ族の集落では、水田稲作が生業の中心である。水田以外の 600 畝から 700 畝の森林が自留山として分割が可能であった。しかし、自留山として個人に分けられることはなかった。社会的の結束が強く、神山がその典型であるが、共同体としての規範が強く残っている社会である。森林の利用も、村の長老たちに手にゆだれられている。具体的に森林を利用するのは、一年のうち農閑期の 2 月か 3 月の 10 日間、長老が定めた期間に燃料材の採取が許されているだけである。結局、森林は、ほとんど手を加えられることはなく、その

ままの姿で残った。

西北部の標高 3200 mの高地にある中甸盆地に生活するチベット族は、裸麦の栽培とヤクなどの放牧が主たる生業である。周辺の山々は、文化大革命時に、森林が伐採された。現在も、草地にブッシュが点々するだけで、森林はほとんど残っていない。そのなかで、唯一の森林が Shidda と呼ばれる神山である。この Shidda も含め、チベット族の集落でも、森林であろうと Bush や草地であろうと、林地が、自留山として個人に分割されることはなかった。

チベット族にとって、重要な森林資源は、薪炭材とともに、厩舎に敷きつめる枝葉である。秋、放牧していたヤクや牛を厩舎に入れる前に、カシ類（Fagaceae）を刈り集めておく。冬の間家畜は厩舎に入れられるが、一冬経て、家畜の糞と混ぜ合わさった枝葉は、貴重な肥料となる。中甸盆地では、こうして厩肥にしたり、薪炭材にするカシのブッシュは十分すぎるほどある。自給用の資源は豊かにある。一方、販売用に林地を利用しようにも、高地で寒冷なため、適当な樹種はない。林地を自留山に分割してわけても、個々の農民には何のメリットもないのである。

３　林地の「錬金術」

雲南を例にとって、社会的･公的に管理していた林地の、自留山という個人への分割の地域的諸相をみてきた。分割しないという選択肢もふくめて、地域により、さまざまな自留山の利用があった。

中国においては、森林資源を自由財と考え、経済価値がないとする考えが伝統的であった。住民にとって、森林は、とりたてて経済価値のないものであった。むろん森林は、たとえば、燃材を集める場所であり、狩猟の対象となる動物のいるところであり、きのこや薬草を生えている場である。住民にとって「使用価値」があったわけである。

今日、森林そのものが、経済価値をもってくるようになった。森林の価値が、「使用価値」から「交換価値」へとかわる。自留山の利用にみられる変異は、この「使用価値」から「交換価値」へと移り変わる諸段階をみているといえるかもしれない。

再び雲南省に目をむけてみよう。今度は、西の端、ビルマとの国境に近い怒江の上流部である。

怒江の刻む深い谷の急な斜面の上部に、リス族のほか、怒族などの少数民族が居住している。耕地は乏しいうえ、高地にあり（全面積の 69.7％が、耕作限界とされる標高 2400 m以上）、さらに急斜面である（耕地面積の 76.7％が 25 度以上の傾斜地）。一戸当たりの耕地面積・農業生産は極端に低い。水田はほとんどなく、とうもろこしやソバが栽培されている。最貧困地域であり、調査した集落のひとつが属している郷では、1994 年に、全 2388 戸のうち、年間一人あたりの収入が、300 元を超える農家は一戸もなかった。

この地域で 1990 年の半ばから、木材ブロックの切り出しが始まった。半日から一日行程の森林に行く。森林の中には、まだ大木が混じっている。それらを、一人で背負えるだけの大きさのブロックにし、集落まで持ち帰る。その後、週に一度の市に持ってゆき、販売するのである。樹種にもよるが、一本、17 元から 20 元で取引される。ブロックは川沿いの製材所で床材に加工され、省外の都市にまで出荷されるのである。

調査集落のひとつでは、1997 年で一戸当たり年間平均 171 元、1998 年には 319 元の現金を木材ブロックの販売で得ている。それまで平均収入は 300 元にみたない。木材ブロックは、貴重な現金収入源である。

木材ブロックを伐りだす森林は、人々にとってまったく経済価値のないものであった。それが、ある日突然、金になることになった。錬金術である。

繰り返すが、中国では、経済開放による高成長を反映して、森林資源への需要が急増している。たとえば、1973 年から 1976 年にかけての木材需要は年間１９６百万立米（m3）ずつ増加したが、1982 年から 1988 年にかけては、この年間の増加量は３４４百万立米へと増えたという報告がある [Harkness 1998]。

こうした需要にこたえ、自留山の植林は、今後も増加してゆくことが予想される。実際、中国の植林地面積は、すでに世界最大を誇っている。1994 年から 1998 年かけて実施された中国第 5 次森林資源精査の結果報告では、前回（1989-1993 年）に比べ、植林面積が実質 1025 万ヘクタール増加し、4666 万 7000 ヘクタールになったことを明らかにしている （「人民日報網絡版」2000 年 6 月 14 日）。実に、世界の人工林面積の約 26％が中国

である。

しかし木材需要は単に量的なものだけではない。質的な変化、すなわち需要の多様化ももたらした。ことに都市部において、1990 年代に入って、古い建物が次々壊され、近代的なビルへと建て直されていった。旧来の無骨な実用一点張りでなく、新たな建物は、内装にも趣向を凝らしている。怒江流域の、床材としての木材ブロックの搬出は、まさに多様化した木材需要の反映である。

量的な需要には植林で応じられる。しかし、多様化した需要には、植林では対応しきれない。さきの中国第５次森林資源精査で、森林面積は 1 億 5894 万 1 千ヘクタール、森林保有量は 112 億 7000 万立米に達し、それぞれ世界５位、世界７位になったことが報告されている。この森林面積・保有量の増加は、植林によるものである。この植林地増加の影で、天然林は面積的に減少し、質は劣化し続けている。

林地の錬金術のあやうさは、環境、とくに生物多様性保全、という視点からみるとはっきりする。錬金術はしょせん錬金術である。「環境」という視点から、雲南の大地を再び見直せば、森林率の増加は見せかけのものであり、コラージュのように多彩に植林がなされているようにも思えたものが、単調な変化に乏しいものにも見えてくる。

Abstract

Yunnan Province of China has been well known for its rich and diversified forests. But, before the foundation of the People’s Republic of China, throughout the long history of south-bound Han-Chinese migration, the forests in Yunnan have been largely depleted to bush and grassland, or converted into arable lands.

Forests have continued to deteriorate in recent history. During the Great Leap Forward(1958 － 1960) and the Cultural Revolution(1966 － 1976), forests were severely damaged without restriction or protection. In this time of political confusion, people uprooted forests without thought for the future.

Following this “ecological disaster”, the effective policy for reforestation was devolution of forest tenures in early 1980’s. Collectively managed forests were distributed among individual farmers, who were expected to replant the depleted forest for their own economic interest. The construction industry’s demand for timber, which sharply increased in the 1980’s due to economic development, created high market prices for timber. As a result, forest areas, particularly plantation forest areas for commercial purpose, have gradually recovered.

Forested landscapes were not uniform or homogeneous throughout Yunnan. Landscape is the historically constructed “mirror” of social, economical and cultural conditions in each area. Each area has responded and will respond differently to changing factors regarding forest issues. Although forests have become an important national issue, the resolution of each area’s forest issues will depend upon regional conditions.